

にいがた 鳥の四季

恋の歌

雪国・新潟では、春になると街から山へと、雪解けを追うようにサクラが咲き、ブナの新緑が芽吹きます。若葉をえさにする虫もたくさん出てきます。すると、鳥たちはこの虫をえさとして、たくさん食べるようになります。

これは、繁殖(はんしゅう)子ども

春に鳥がたくさん鳴くのは、相手を探しているからです。

ホオジロという鳥は、海辺から市街地、山の中まで、どこでもよく見ることが出来ます。ホオジロの雄は木の枝で胸をさらし、空に向かって大きくくちばしを開けて鳴いています。朝から晩まで一羽の雄を観察すると、ホオジロの意外な行動を知ることができます。

どこへでも自由に飛んで

繁殖期 異性を求めて



枝先にとまってさえざるホオジロ＝阿賀町

向かって、何のために鳴いているのでしょうか。
ホオジロがさえざっている範囲に、ホオジロの別の雄が入ってくると、一直線に向かって飛行し、激しく攻撃して追い立てます。雌が入ってくると、サッと近づき、そばで小刻みに体をふるわせ、やさしく鳴きます。ホオジロは、ホオジロの雄と雌に向かってだけ鳴いていたのです。同じさえざりが、雌には「ここはわたしの場所だ。入ってくるな」と聞こえ、雌には「わたしの場所は食べ物もあり、安全に子育てができるからいらっしゃい」とでも聞こえるのでしょうか。

山や川が入り組んだ大自然の中で、小さな体の鳥の雄と雌が出会うのはとても難しいことです。雌は、遠くからでも自立つように、種類によって違う羽の色や模様を鮮やかにし、縄張りの中で懸命にさえざりの声を張り上げて雌を待ちます。雌は、それぞれの雄の縄張りを訪ね、そこが安心して子育てできる場所かどうかをよく見て決めます。鳥の世界では、雌が雄を選んでいるのです。

このように鳥たちが繁殖するために、雌にも雌にもさまざまな困難があり、大きな苦勞が必要となるのです。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小学校校長)

を産んで仲間を増やすこと)の季節が来たことをあらわしています。卵を産んだり、ひなを育てたりするには、たくさん食べ物が必要になるのです。このほかにも繁殖期を迎えた鳥の様子に変化が見られます。たくさん鳴くようになるのです。なぜでしょうか。

繁殖を始めるために最も大切なことは、相手を見つけることです。雄は雌に、雌は雄に出会うことです。

繁殖を始めるために最も大切なことは、相手を見つけることです。雄は雌に、雌は雄に出会うことです。

新緑がまばゆい季節になりました。残雪の越後山脈を背景に青葉がそよいでいます。

美しい新潟の景色の中で、ムクドリやシジュウカラなどの鳥たちが、家の周りを気ぜわしく飛び交う姿が目立ちます。

この時季になると「止まる木もないのに、車の上に鳥の白いふんが」「鳥は飛びながらふんをするの」と、不思議に思ったことはありませんか。それは、例えばムクドリが家などに巣を作り、ひなを育てていることと関係があるのです。

ひなが巣の中で食べ物と要求すると、親鳥は餌を運びます。何羽もいるひなのなかで、餌をもらえるのは首をいっばいに伸ばし、だれよりも口を大きく開けたひなです。餌をもらったひなはすぐに、餌を運んできた親鳥にお尻を向け、ゼラチン状の白いふんをします。すると親鳥はふんを口にくわえて巣から飛び去り、少し離れたところでふんを落とします。親鳥が餌を探す場所はほぼ決まっているので、同じ辺りに



ひなに食べさせるためにセセリチヨウをとらえたシジュウカラ

懸命に餌やふん運び

ふんが落とされていたのです。

ところで、白いふんだと思っていたのは、本当は鳥の尿うりなのです。人間とは異なり、鳥はふんと尿を一つの穴からひとかたまりに出します。白いかたまりに黒っぽいものが混じっているのを見たことがあるでしょう。黒い部分がふんなのです。

鳥は水に溶けないかたまりの状態けいで尿を排せつしています。もしふん尿が巣の中や、巣の周りにそのままだったらどうでしょう。白く自立つふんが自印となり、またにおいによって巣はたちまちへびやイタチに気付かれ、ひなは襲われてしまうでしょう。

また巣がふん尿だらけになれば、ひなの健康にも害を及ぼすに違いありません。ひなの安全のために親鳥は巣から運び出していたのです。

空を飛ぶ鳥にとって、ひなを育てる巣

子育て

は危険がいっぱいの場所です。しかし、卵がふ化し、ひなに羽毛が生え、空を飛べるようになるま

ではそこから離れることができません。だから、親鳥は驚くほど早くひなを育てています。より早くひなを成長させ、まだしっかりと飛べない状態のまま、ひなを巣から離れさせています。

例えば、シジュウカラの子育てはどうでしょう。ふ化したひな八羽が巣立つまでの約十七日間に、親鳥は四千回、ひなに餌を運びます。巣立ちの一週間前、ひなが最も餌を要求するときは、一日に二百七十回ほど運びます。ムクドリはもっと多く、一日に三百二十回ほどになります。

初夏を迎えた新潟は、どの地域でも、そこに生きる鳥の親たちが、それぞれの育て方で、命懸けでひなを育て、繁殖期を過ごしているのです。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小学校校長)

にいがた 鳥の四季

街も山も緑の葉が生き生きとそよいでいます。木々の茂みの中からはチィチィチィや、シエツエツエと、いかにも幼く聞こえる騒(さわ)がしい声(こゑ)が、あちこちから聞こえてくる季節(きせう)です。

街ではシジュウカラやムクドリ、ヒヨドリなどが、また山ではオオルリやキビタキなど、巣立ちしたばかりのヒナが木立(きだて)の中で出(で)ている声(こゑ)です。ヒナたちはなぜこのような騒(さわ)々(ざ)しい声(こゑ)を出(で)し、何をしています(して)いるのでしょうか。

観察(くわんさつ)していると、親(おや)がくちばしいっぱいに虫(むし)などをくわえ、声(こゑ)のする茂(も)みに飛びこんでいきます。その瞬間(しゅんかん)、幼(お)い声(こゑ)はより大き(お)くなり、次に静(しず)まり、その後、親鳥(おやどり)が茂(も)みから飛び出(で)し、再び餌(えさ)取りにいきます。次(つぎ)は、少し離(はな)れた別の方(かた)向(む)から聞こえる声(こゑ)に向(む)かって餌(えさ)を運(た)びます。

巣立ち(すだち)して一帯(いちたい)に散(ち)らばってひそむヒナが、おなか(なか)がすいた自(みづか)己(ご)の存在(そんざい)を親(おや)に知(し)らせ、餌(えさ)を求(もと)める



巣立ちしたアオバズク(フクロウ科)のヒナ(上)と、見守る母親(おとこゝろ)のころ南(みなみ)からやってくる(くる)こと(こと)からこの名(な)がある

敵(てき)避け(を) 急(いそ)ぎ連(つ)れ出(で)す

叫(こゑ)び声(こゑ)だ(だ)った(た)ので(で)す。 や(や)つと(と)飛(と)べるか(か)どう(どう)かと思(おも)えるヒナ(ひな)たち(たち)を、安(やす)全(ぜん)と思(おも)える巣(す)から、ど(ど)うして急(いそ)いで巣(す)立(た)せ(せ)るの(の)で(で)し(し)ょう。 よ(よ)ち(ち)よ(よ)ち(ち)歩(あ)きの幼(お)児(こ)を保(たも)つ保(たも)つ室(むろ)から連(つ)れ出(で)すよ(よ)うな(な)も(も)の(の)で(で)す。 実(じつ)は、巣(す)立(た)ち直(ただ)前(まへ)の巣(す)は危(あや)険(けん)が(が)い(い)っぱ(ぱ)い(い)な(な)の(の)で(で)す。 不(ふ)思(し)議(ぎ)な(な)こ(こ)と(と)ヒナ(ひな)が育(そだ)った(た)こ(こ)ろ(ろ)が、へ(へ)ビ(び)な(な)ど(ど)が最(も)も襲(襲)う(う)と(と)き(き)で(で)す。 ま(ま)る(る)で(で)、ヒナ(ひな)が育(そだ)って「食(た)べ(べ)ご(ご)ろ」に(に)な(な)る(る)の(の)を(を)じ(じ)つ(つ)と待(まち)っ(っ)て(て)い(い)る(る)か(か)の(の)よ(よ)う(う)で(で)す。

ヒナ(ひな)は、シジュウカラ(シジュウカラ)やホオジロ(ホオジロ)のよ(よ)う(う)に、ふ(ふ)化(か)した(した)と(と)き(き)に(に)は目(め)が開(あ)かず、裸(はだか)で、歩(あ)け(け)ない(ない)種(しゅ)と、カルガモ(カルガモ)やオシドリ(オシドリ)のよ(よ)う(う)にふ(ふ)化(か)した(した)と(と)き(き)に(に)も(も)う(う)目(め)が開(あ)き、羽(は)毛(も)で覆(おほ)われ、素(す)早(はや)く歩(あ)いたり泳(およ)いだり、餌(えさ)をつい(つ)ば(ば)む(む)こ(こ)と(と)が(が)で(で)きる(きる)種(しゅ)が(が)あ(あ)り(り)ま(ま)す(す)。 し(し)か(か)し、カルガモ(カルガモ)の親(おや)子(こ)が引(ひ)っ越(こ)すよ(よ)う(う)に、ど(ど)ち(ち)ら(ら)の種(しゅ)も急(いそ)いで巣(す)から引(ひ)き離(はな)すこ(こ)と(と)は同(どう)じ(じ)で(で)す。

巣(す)立(た)ち

安(やす)全(ぜん)と思(おも)われる(る)巣(す)は一

度(ど)襲(襲)わ(わ)れる(る)と(と)す(す)べ(べ)て(て)のヒナ(ひな)を失(う)っ(っ)て(て)しま(ま)う危(あや)険(けん)な(な)場(ば)所(じょ)で(で)す。 巣(す)は人(ひと)間(かん)の家(いえ)ではあ(あ)り(り)ま(ま)せ(せ)ん。 赤(あか)ちゃん(ちゃん)を産(う)み、必(かなら)ずな(な)期(き)間(かん)だ(だ)け(け)滞(た)在(ざい)す(す)る産(う)科(か)医(い)院(えん)のよ(よ)う(う)な(な)も(も)の(の)で(で)す。 親(おや)はヒナ(ひな)たち(たち)を、危(あや)険(けん)な(な)巣(す)から少(すく)し(し)でも早(はや)く引(ひ)き離(はな)します。 巣(す)立(た)った(た)ヒナ(ひな)は、隠(かく)れ場(ば)所(じょ)と食(た)べ物(もの)が豊(とよ)富(とみ)な(な)林(りん)の中(なか)を、飛(と)ぶ(と)練(れん)習(じゆ)を繰(くり)返(かえ)し、食(た)べ物(もの)の探(たず)ね方(かた)、敵(てき)の見(み)分(わ)け方(かた)な(な)ど(ど)の体(てい)験(けん)を通(とお)して学(まな)び、生(なま)きる知(ち)恵(ゑ)を身(み)につ(つ)ける(ける)の(の)で(で)す。

巣(す)の外(ぐわい)で若(わか)鳥(どり)が親(おや)から受(う)ける世(よ)話(わ)は、生(なま)きる知(ち)識(し)を得(え)る大(だい)切(せつ)な勉(めん)強(きやう)で(で)す。 短(たん)い学(がく)習(じゆ)が、こ(こ)れ(れ)か(か)ら生(なま)き(き)て(て)い(い)ける(ける)か(か)ど(ど)う(う)か(か)を左(ひだり)右(みぎ)する大(だい)切(せつ)な期(き)間(かん)な(な)の(の)で(で)す。 親(おや)はヒナ(ひな)を巣(す)に(に)とどめ(と)めて全(ぜん)部(ぶ)を失(う)う(う)よ(よ)り、外(ぐわい)に連(つ)れ出(で)して分(わ)散(さん)させ(せ)、一(ひと)羽(は)でも多(おほ)く確(たか)実(じつ)に育(そだ)てる方(かた)法(ぽう)を(を)選(えら)ん(ん)で(で)い(い)る(る)の(の)で(で)す。

石(いし)部(べ) 久(ひさ)

(日本(にっぽん)野(や)鳥(どり)の会(かい)、日本(にっぽん)鳥(どり)学(がく)会(かい)、藤(ふじ)塚(づか)小(せう)学(がく)校(がう)校(がう)長(ちやう))

に(に)い(い)が(が)た(た) 鳥(とり)の(の)四(し)季(き)

ツバメやスズメ、ムクドリがそれぞれ五、六羽の群れになり、あっちにもこっちにも見られる季節です。新しく若鳥が加わり、鳥の数は最も多くなります。親鳥は餌を採るうえで最も得意とする場所に、若鳥たちを連れていきます。そこで生活を教えるのです。

ムクドリはコガネムシの幼虫やハサミムシ、ケラが多い草原へ。スズメは草の種子や幼虫がいる畑地や荒地へ。ツバメは昆虫が飛び交う水田や河原に生活場所を移します。

鳥の家族を見ると、どれが親鳥か、若鳥なのか分からないほど体は同じ大きさに見えます。若鳥と若鳥を比べても、同じです。親鳥がヒナの一羽一羽を知ったうえで、平等に餌を与えて育てたのでしょうか。

親が子どもに餌を与える様子がよく見えるツバメを観察しました。ヒナのなかで、兄弟姉妹を押し分け、元氣よく背伸びし、大きく口を開けて叫ぶヒナの口に、親が餌を入れるのが分かります。と同時に、餌をもらえ



元氣よく餌を要求するツバメのヒナに、大きなハ工を食べさせる母親。6月29日、藤塚小学校、秋元直子教諭撮影

親を見て生き方学ぶ

大空へ

にいがた 鳥の四季

なかったほかのヒナたちは懸命に叫び続け、自分の口に餌が入るようにくちばしをいっぱいに開けます。今度は、その中のヒナに餌が与えられます。このようなヒナたちの行動の結果、ほぼ均等に餌が分け与えられることになるのです。

実験では、くちばしの周りを黄色に塗ったヒナの模型を作り、餌をねだる声を聞かせ、模型の口を開くと、親鳥は餌を入れます。親がヒナ一羽一羽を覚えて餌を与えているわけではないことが分かります。親は、餌をねだる声が聞こえ、薄暗い巣の中でも目立つ黄色い輪が見えると、食べ物をつまむ行動を起こすのです。

ヒナは生まれてからしばらくの間、くちばしは黄色です。成長するにつれて黄色は少しずつ消えていきます。すると親鳥は、ヒナがどんなに餌をねだっても与えようとしなくなります。だからヒナはくちばしが黄色い短い期間に、より多くの餌をもらえるよう声を出し、しつこいと思えるほど親の後を追いかけて、餌をもらいながら生きる方法を学び、少しずつ行動範囲を広げていきます。

くちばしの黄色が消え、親の世話を受けられなくなるころ、隣で生活する同じ種類の家族と出会い、若鳥は群れの生活をするようになります。家族より大きな集団となり、わき立つ夏の入道雲とともに次第に大きな群れへと変わっていくのです。

卵からかえり、目が開くと同時に、自分がそこにいることを全身で訴え、親鳥に必死でついていく。食べ物を得ながら、親やほかの鳥たちから生きていくためのいろいろなことを学ぶ。こうして、厳しい自然界で生きていく可能性を一步一步確かなものにしていくのです。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小学校校長)

ぐんぐんと気温が上がる夏が続いて
 ます。木が少ない平野部や市街地で見ら
 れる鳥たちは、暑い日差しの中、木や電
 線、くいなどに止まり、ほとんどが口
 を開け、空に向かってあえぐような姿
 をしています。何をしているのでしょ
 う。

日中、暑い日差しに身をさらしている
 のは、しぐさや羽毛の様子を見ると、生
 まれてから初めての夏を経験する若鳥た
 ちなのです。暑さにじっと耐えているの
 です。

鳥は暑い夏が苦手です。特に若鳥は猛
 暑をどのように過ごしたらよいのか分か
 りません。体験と学習を通して身に付け
 ていくのです。

私たちは暑さを感じると体がひとり
 でに反応し、皮膚の表面から汗を出して
 体温を下げます。しかし鳥は羽毛を持
 つため、汗をかくこと
 ができません。もし汗
 をかくことができれば、
 空を飛ぶための大切な羽



川の上流で岩に止まるキセキレイ

暑さが苦手

涼しい朝と夕に活動

にいがた 鳥の四季

がぬれ、翼で自由に風を操作することが
 できずに、命が危険にさらされるでしょ
 う。

鳥はほかの動物と違って羽を持つた
 め、汗ではなく、気のうちという特別な臓
 器で体温を調節します。気の中は肺と直
 結している袋状の器官で、そこで水を蒸
 発させることで体を冷やしているの
 です。

電線に止まるスズメやムクドリ、カラ
 スが空に向かって口を開けている姿は、
 暑さから逃れようと気のうちから水を蒸発
 させ、体温を下けている姿なのです。こ
 の鳥たちが活動する時間帯は涼しい朝と
 夕方に集中します。早朝に目覚めた鳥は
 水辺に来て水を飲み、涼しいうちに盛ん
 に餌を探ります。日が昇ると水浴びをし
 て安全な場所まで羽をつくりかえます。水浴
 びは羽を整えるためですから、冬でも行
 います。しかし暑い夏に
 は水浴びの回数も増えて
 いることから、鳥も涼し
 さを求めていることがう
 かがえます。

山や森に比べると木や水が少ない平野
 部、市街地で生まれたスズメやムクドリ
 たちは暑さに耐え、自分たちの環境を離
 れずに生活しているのです。

一方、豊富な木や水が適度な温度や湿度
 を与えてくれる山や森。ここに住む鳥
 たちはどうでしょうか。夜明けとともに
 キビタキやコガラ、ヒガラが鳴きながら
 盛んに活動し、清流ではキセキレイの若
 鳥たちが水にすむ昆虫を探します。日差
 しが強くなると、鳥たちは緑の葉の中に
 身をひそめ、活動は静まります。

このように暑いのが嫌いな鳥たちは、
 平野部でも山でも同じように、生活のリ
 ズムを工夫しながら懸命に生き抜いてい
 るのです。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小
 学校校長)

秋晴れの真つ青な空を、ヒヨドリの群れが「ヒヨック ヒヨック」や「ピーーヨ ピーーヨ」にぎやかに鳴きながら、二十羽ほどのまとまりとなって、次々と北から南へと波のように飛んでいくのを見ます。

また十月初めには、北の大地からコハクチョウの群れが越後平野の湖や沼にやってきます。渡ってきたばかりのコハクチョウの群れは、「コウッ コウッ」と鳴きながら飛ぶのですぐに分かります。秋は多くの鳥たちが群れになって渡る季節なのです。渡りという鳥の移動は、一年に秋と春の二回ありますが、秋の渡りは春の渡りに比べると、鳥たちにとってはとても危険な旅なのです。それはなぜなのでしょう。

秋の渡りの群れを構成している鳥は、今年生まれた若鳥が多く混じっているのです。若鳥は親鳥に比べると、生きていくうえに必要な経験が足りません。何が危険なのか、知らないことがたくさんあるのです。



北極海に面したツンドラの湿原で生まれたコハクチョウは親と離れず新鳥の冬を暮らす。若鳥は羽毛が灰色

秋の渡り

若鳥たちに生きる試練

たとえば、秋になると学校のガラス窓の下に、小鳥が落ちて死んでいるのをよく見かけます。そのほとんどが若鳥です。この鳥たちは、ガラスというものを知らないで育ちました。学校の建物が岩山に見えたのです。ガラス窓に映る周りの樹木を、安全な暗い茂みだと勘違いし、そこに透明なガラスがあることを知らずに飛び込んで、ぶつかっただけでしょう。

ところで、この鳥たちがなぜ若鳥だと分かるのでしょうか。よく観察してみると、若鳥の特徴があります。この季節に、成鳥か幼鳥かは、羽を見れば分かります。今年生まれた若鳥は、羽に光沢がないことや、羽の先がとがっていることなど、幼い鳥の特徴が残っています。

コハクチョウの群れを見ると、真つ白な羽毛の二羽の親鳥と一緒に、灰色が混じった二、三羽の幼鳥がいます。それから、小鳥を手にとることができれば、頭の骨を見てみましょう。

成鳥は骨が完成して白っぽく見えますが、今年生まれたばかりの未熟な若鳥の頭の骨は、血液の色が透けてピンク色に見えるのです。このように、北から南へと向かう秋の渡りは、学習したことも経験したことも少ない若鳥たちが食べ物を探し、冬を過ごす安全な場所を求め、危険な旅なのです。

ヒヨドリやコハクチョウたちがぎやかに鳴きながら渡っていくのは、実は不安をいっはいかかえていて、「自分はここにいるんだよ」ということを仲間に分らせながら飛行していたのです。そんなことを知ると、鳥たちが厳しい自然の中で自分の力で生きていく大変さが伝わってきます。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小学校校長)

にいがた 鳥の四季

雪が積もった山地のブナの森から「ピッピッピッ、ピッピッピッ」と叫ぶ鋭い声か風に乗って聞こえてきます。谷間から断続的に響くこの声は、クマタカの幼鳥が親鳥を呼ぶ声なのです。今年の初夏に生まれ、体の大きさも親鳥と同じく成長し、翼を広げると一七〇センチにもなった幼鳥は、雪が降る季節になっても、自分で餌が十分に捕れず、親から食べ物をもらって生活しているのです。

一方、この森で同じころ生まれたウグイスやホオジロ、ヤマガラは生まれてから、二週間ほど巣の中で育てられ、その後、巣の外で約一カ月という短い間、親とともに生活し、餌をもらい、生きていくさまざまなことを学びます。

オオルリやキビタキも秋風とともに、初めての海を自分の翼で飛び、はるか遠いジャワ、スマトラなど南の国々へ越冬のために飛んでいきます。

このように素早く成長して親離れする小鳥たちに比べ、クマタカの幼鳥の自立がこんなにも遅い



晩秋の渓谷で親鳥を呼ぶクマタカの幼鳥

越冬の知恵

種で異なる学習期間

のはどうしてなのでしょう。クマタカの雌と雄は一年を通して山中の決まった広さで行動し、生活しています。自分が行動する範囲の中で、ノウサギやヤマドリ、リスやカケス、ヘビなどさまざまな生きた動物を捕って食べる猛きんです。

しかし冬になると、餌となる動物の種類と数が一段と少なくなります。例えば、子育てするときにはたくさん与えていたヘビなどの爬虫類は冬眠し、まったく捕ることができません。だから、クマタカは食べ物をえり好みしてはられません。生きた獲物であれば何でも襲って捕らえます。

しかし、さまざまな相手を捕るには、さまざまな技を使わなければなりません。あるときは樹木の幹や枝に動きリスやカケスを狙う。あるときは藪に潜むヤマドリを追う。あるときは木立から飛び出すノウサギを襲う。このように生きた獲物を捕らえることとはとても大変です。

狩りをした後のクマタカのしな模様の尾羽がぐしゃぐしゃに乱れていることがあります。生きた獲物を捕らえることの大変さが分かります。

獲物が少なくなる雪国の厳冬期は、初めて冬を越すクマタカの幼鳥には困難が多いのです。一回の繁殖に十個ほどの卵を産み育てるシジュウカラなどの小鳥類に比べ、クマタカは一つの卵しか産み育てません。一羽の子どもが確実に厳しい雪国を生き抜くことができるよう、親鳥は二年ほどの長い時間をかけてわが子を育てていくのです。

それぞれの種がそれぞれの環境で生き続けるため、必要な学習時間は種によって決まっています。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小学校校長)

にいがた 鳥の四季

新潟の冬は生き物にとっても大変な季節です。小鳥たちは生きるため、一日のほとんどを食べ物を探することに費やしています。

また、自分が他の動物に食べられないよう警戒し、逃げたり避けたりすることに細心の注意をおこたりません。

雪が降ると鳥たちの生活は一変します。たくさん枯れ葉、そこに生息するミミズなどの生き物、地上に落ちた木の実や大量の草の種子など、鳥たちが生きていく上で必要な食べ物の多くを雪が隠してしまつからです。

冬の生活を知っている成鳥でさえ、食べ物を探し出すことが大変な季節です。まして冬を経験していない若鳥にとつて、どのように生活すればいいのか戸惑うことが多いに違いありません。

この厳冬期を、食べ物を探して生きる小鳥たちの暮らし方には二通りあります。群れて暮らすか、単独で生活するか。それは鳥の種類によって決まっています。

アトリやマヒワ、カシラダカなどは同じ種類



繁殖期には山地源流の森で生活するミソサザイも、冬には人家周辺で虫やくモなどを探し、生きている

四季の鳥のいがた

仲間や1羽で懸命に

冬の餌探し

で、数十、数百、時には数千羽という群れをつくり、まとまって行動します。これらは木の実や草の種子などを主な食物としているのです。

広大な平野の雪原に、どこに食物があるのかを見つけたことは大変なことです。隠れる場所のない平坦な土地に散在する食べ物をより多くの目で探し、一羽が見つけると群れ全体で餌を探ることができるのです。

また群れて生活することによって、ハヤブサやチョウゲンボウなど、猛禽の襲撃を早くから発見することができます。集団になって飛び、攻撃の視点をそらすこともできるのです。

一方、昆虫やくモなどを餌とするウグイスやミソサザイ、シヨウビタキなどは冬を単独で生活します。雄も雌も、また親も子も、仲間とも群れることなくたった一羽で生活するのです。

庭の樹木の茂みにジャツ、ジャツ、ジャツや、チャチャツ、チャチャツと、甲高い声が聞こえたら、それはミソサザイかウグイスがここ

で今、食べ物を探している。だから近づくな」と、自分の位置を同じ種類の鳥に向かって知らせる声です。

冬は昆虫やくモがとでも少なくなりま

す。また虫たちは卵やさなぎになって住み方を変え、木の皮の割れ目やすき間に潜んでいます。これらは、群れで食べるにはとても不十分な量しかありません。だから、虫などを食べる鳥は一羽で行動し、枝から枝へと丁寧に虫を探しながら生活しているのです。

石部 久

(藤塚小学校校長、日本野鳥の会、日本鳥学会)

同じ冬でも雪がたぐさん積もる年と、雪が少ない年では、鳥たちの暮らし方が大きく変化します。例えばガンやハクチヨウ、カモたちは、田んぼに雪がないうちは、出掛けていって餌を食べますが、冬が深まり、田んぼに雪が積もると鳥屋野瀧や福島瀧など湖沼の中で種子や水草を探して過ごします。

ところが今年は二月になっても田んぼが雪に埋もれることがないため、湖沼から飛び立ち、広大な平野に食べ物を探すハクチヨウ類をはじめ、草の実を食べる鳥たちを見ることができません。

このように自然界に生きる動物は気候や環境によって、食べ物を簡単に見つけたり、見つけられなくなったりするので

「今までいた動物がいなくなった」「いなくなった動物が見られるようになった」のは「環境が変わった」からなのです。

環境の変化は、動物たちがそこで生きていくことができるのか、できなくなるのかを決める重大な



3階建ての学校の屋上から辺りを警戒し、ネズミなどの獲物を狙うハクチヨウゲンボウ

環境により生活変化

問題なのです。鳥たちの生活を変えるのは、雪の多い少ないだけではありません。

タカ科のノスリやハヤブサ科のチョウゲンボウは冬は平野部でネズミなどを捕らえて食べて生きています。春が来るとノスリは山の森に移って子どもを育てます。チョウゲンボウもこれまでは岩山の崖に帰って卵を生み、繁殖していました。しかし今、チョウゲンボウの中には、一年を通して平野で生活するものも増えてきました。

なぜ、チョウゲンボウは「春は山の草原で狩りをしながら崖で子どもを育て、秋冬は平野で獲物を捕って生きる」という生活を変えてしまったのでしょうか。

それは、平野にビルディングや新幹線の高架橋、高い鉄橋などができたからです。ビルなどの大きな建造物はチョウゲンボウから見ればまるで岩山です。田や畑などは捕食動物がたくさん生息する草原です。

少雪の雪

このように、人が生活するところに、チョウゲンボウという種が獲物を捕食し、子育てもできる岩山と草原の環境ができたのです。

新しく生きる土地を都市周辺に見つけ出し増えているのはチョウゲンボウばかりではありません。草たけの低い地面にくちばしを突き刺し、コガネムシの幼虫などを探すムクドリの大群。刈り取りを終えた秋冬の農耕地に大量に残されたイネの種子を食べる、大きな群れのカラスやハクチヨウ類など、たくさんいます。

自然界では環境と、そこにある食べ物の量によって、どんな鳥がどれくらいそこで生きていけるかが決まっています。

石部 久

(日本野鳥の会、日本鳥学会、藤塚小学校校長)

にいがた 鳥の四季

雪国新潟に桜の花咲く春がやってきました。桜の開花を待ち焦がれているのは、わたしたち人だけではありません。メジロやヒヨドリなど花の蜜を好んで食する鳥たちは桜の開花を、長い冬を過ごし待っていました。雪国では晩秋や冬に咲く花はとでも少なくなりません。その間、町や公園に植えられたサザンカやヤブツバキを探し生活していました。残雪の山々に咲くユキツバキなどは、緑の葉と対照的な真っ赤な花を咲かせ、ヒヨドリやメジロを呼ぶのです。

種を作るための受粉が自分でできないツバキは、ハチなどの虫がいけない季節に花粉を運ぶ鳥を待っていたのです。冷たい風が吹く春に咲く桜も同じです。桜は自分の花粉では実をつけ種を作ることができません。小さな行動範囲から蜜を集めるミツバチのような小さな動物では異なる木から受粉することとは望めません。遠い距離も簡単に飛行し、山に点在する桜の木から木



アカシヨウビン(カワセミ科)は、南方からブナの森にやってくる。湿った沢すじでカエルやサンシヨウウオ、サワガニやネズミを捕食し子供を育てる

山々飛翔し桜、植樹、

へ、花粉を運ぶ鳥の飛翔力が必要なのです。

雪が消えた日当たりのよい斜面に「あんなところにも桜の木が」と、ピンク色のあざやかなオオヤマザクラ、白くかすみかわきたつようなカスミザクラなど、たくさんのヤマザクラが咲いていることに気付くでしょう。鳥が蜜を求めて桜の花を訪れ、他の花粉をつけると初夏にサクランボができるのです。その実は生活のための食料になったり、繁殖のために餌として子供に与えたりします。サクランボは鳥の体に入り養分として利用され、種は二時間後に口から吐きだされ鳥の飛ぶ先々に散布されるのです。

美しい雪国のヤマザクラはヒヨドリやメジロなど動物たちが植えた樹木だったのです。自然の中の多くの樹木ひとつひとつが、このようにさまざまな動物と密

春運ぶ

接に関係しながら生き物たちの生活する環境をつくっているのです。ヤマザクラが咲く春とともに、多くの鳥たちは繁殖行動を開始します。冬を越したヤマガラやアカゲラ、南の国から海を越えて落葉広葉樹林に飛来するキビタキやアカシヨウビンも、自分たちが長い時間をかけてつくった豊かな森林で子育てを始めるのです。

近年、アカシヨウビンやサンコウチョウ、キビタキなど、子育てのため南方から飛来する鳥の個体数が減少しているといわれています。少なくなった原因が、越冬する東南アジア熱帯雨林の森の減少なのか、日本の落葉広葉樹林の変化なのかは知ることはできません。

大自然の中でそれぞれの種が生きていく条件があれば、森が美しくあれば、生き物たちは悠久の時を超えて生きていくことができるのです。

石部 久

(藤塚小学校校長、日本野鳥の会、日本鳥学会)

にいがた 鳥の四季